

ロケが行われた。美しい川口芳子が舟を浮べて、舟のへりから薬花をすくい上げる、そんなシーンがあった。彌がでけると、舟を仕立てて、霞ヶ浦を渡り、川口を上つてこの堀江に入り、豊島彌市場に運んだ。用事が済むと、吾妻屋でそばをたべたり、向う岸の橋の畔の土佐屋の真白なフクフクの酢まんじゅうを買つたりするのが楽しみであつた。村に与吾兵衛船と呼ぶ和舟の定期便があつて、常陸屋に米を運ぶ、その舟に乗せてもらつて土漕に出たこともあつた。町の子供たちが橋のたもとでいとも簡単なつり竿で、えさにごはん粒をつけて釣をしていた。おぼそなどがヒヨヒヨイとおもしろいように釣れるので、田舎の子のわたしは、こんなところで釣ができる町の子がうらやましかつた。水もきれいであつた。遠い昔の思い出である。その堀江の半分が埋め立てられて祇園市場というのができた。下の方半分は、その後浅く、汚なくなつたまゝ放置されていたが、これも埋められて駐車場となつた。堀江はだんだんに埋め立てられて、もと片車の汽船が発着していた、そのちよつと手前まで来てしまつた。

堀江があつた時分は、いかにも水郷土浦というにふさわしかった。堀江がなくなつてからそのイメージはかき消されてしまつた。

言い合つたより、土浦を訪れた諸家の詩文に描かれた水藻花咲く堀江は、今やかくのとおりであるが、そのほか町中に流れていた小川（水路）もほとんど埋められてしまつた。川が埋められて、その代り舗装道路ができて、ビヨロビヨロ車が走り廻っている。時勢だな、と思ふ。出るのはため息ばかりである。

水には水の流れる水理というものがある。こんなにとこもかしこも埋めてしまつていゝのだからか。一見かつこよく街が整備され、車ラッシュをさばく窮餘の策であるが、この極端に無視された自然が、いつなんどきおこり出さないと限らない、街を歩行しながら、ときに考へてしまうことがある。ただ昔を懐かしがるばかりではないのである。（48・5・7）

水草わけて夏菰すいすい漕ぎ出づれば
風濁りせる浅き湖にして